

この五月二十日、台湾では民主進歩党の陳水扁氏が「中華民國第十代総統」に就任する。今世紀初頭の「孫文革命」以来の伝統をもつ中国国民党の長期一党支配が崩れ、野党の政権が誕生すること自体が画期的であるだけではない。指導者の死を待たずに民主的な直接選挙によって実現する政権交代は、中華世界では有史以来最初の出来事でもある。

「人民の意思」が表現

この二つの事実だけでも大変なことなのだが、今日二千二百万人の台湾民衆の大部分にとっては、大陸中国での内戦と革命に敗北して台湾に渡来してきた「征服王朝」としての国民党政権が、まさに李登輝総統の強調して止まない「人民の意思」によって、その歴史的使命の終焉を告げられたに等しいことに大きな意義があるのだ。しかもこのような政治発展は、台湾の無血革命として、世界が見守るガラス張りの舞台上で成り遂げられたものである。

それだけに、こうした展開をもたらした李登輝総統の十二年間の治世を今ふりかえてみることに緊要であろう。誰もが認め得るように、李

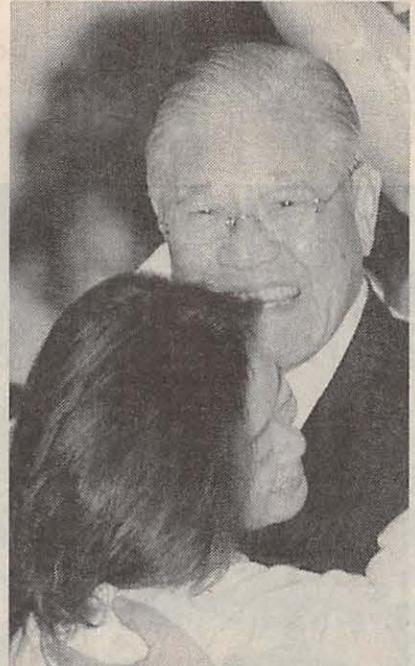
登輝時代の台湾が歴史にくっきりと刻んだ軌跡は、台湾の民主化とアイデンティティーの深まりである。民主化を横軸としてアイデンティティーの確立を縦軸として台湾の変化をみる視座が、中台関係のような国際政治上の論点を考える際にも、ぜひ導



中嶋 嶺雄
東京外国語大学学長
(国際関係論)
なかじま・みねお 大東ル校を
1936年生まれ。カリフォルニア大学サンディエゴ校を卒業。1959年より現職。『アジア・オープン・フォーラム』(サントリー賞受賞)など。

台湾・李登輝総統の十二年間

民主化と「認同」で新時代へ



台北の国民党本部で、3月、党主席を兼任し、スタッフと抱き合う李登輝総統(ロイター)

入されなければならない。一口に民主化といえども、台湾の場合、それはたんに政治制度の改組や総統民選への憲法修正などいわゆる憲政改革のみにはとどまれない困難を伴っていた。すなわち、蒋介石・蔣経国「外来政権」の党国体制と白色テロに象徴される国民党の統治システムを、その内部から抉って切り崩すという孤立無援の闘いを、李登輝総統は当初よきなくされたのであった。李登輝氏が蔣経国総統の死によって副総統から初めての本省人(台湾人)総統に就任した一九八八年から九〇年代初頭にかけては、国民党外省人の古参幹部が幾重にも新総統を包囲しており、たとえば軍の長老・郝柏村参謀総長による「軍事クーデター」計画を察知して早晩に防止するといった瀬戸際にも立たされたのであった。当時まだ形勢力をもっていた宋美齡女史(蒋介石夫人)の不当な政治介入を、女史の話す上海語を李総統が聴き取れないことを理由に書面に残すよう追って撤回させるといった知恵も絞らねばならなかった。

石夫人の不当な政治介入を、女史の話す上海語を李総統が聴き取れないことを理由に書面に残すよう追って撤回させるといった知恵も絞らねばならなかった。

深まる同一性の認識

このように台湾の民主化は、国民党主席としての李登輝氏がまさに国民党旧体制と闘い、国民党を一步一歩台湾化してゆく熾烈な政治闘争によって獲得されたものであった。そのような李登輝総統は、国民党政府が台湾民衆を弾圧した四七年の

の明るさと未来思考やベンチャー精神の旺盛さは、まさに特筆に値する。秀でた学識と哲思

以上の二つの座標軸に加えて、李登輝時代を語る上で欠かせないもう一つの特徴は、李総統自身が示した政治的リーダーシップとマネジメントシップである。この点では、李総統自身もつ学識と哲学を指摘しないわけにはゆかない。敬虔なクリスチャンであり、すぐれた農業経済学者である李登輝氏は、その説書量において並外れた存在であり、MIT(マサチューセッツ工科大)のレスター・サロー教授をはじめとする世界の有数の学者と十分にわたりあってきた。人世論・文明論や経済政策など、官僚の作文を棒読みすることなど一切なく、いつも自らの言葉で語ってきた政治家である。この第三の座標において、台湾の李登輝時代はつねに「知的な状況」たり得たのであり、ここにも大きな歴史的意味がある。しかも、このような歴史的時代を中国からの絶え間なき圧力と孤立化した国際空間において貫徹したのであった。

「認同」(北京語)には「認同(レントン)」という訳がある。まさに今日の台湾人は自分たちを中国人としてではなく「台湾人」としての同一性において認識している。この点では最近の意識調査が明白に示している。李登輝氏の著書「台湾の主張」(P.H.P.研究所)や「司馬遷と蔣氏との対話」(朝日新聞社刊「台湾紀行」所収)にみられる台湾人意識の深層こそ、今日の台湾民衆の知的公共財だといわねばならない。民主化を伴わないアイデンティティーの深まりがしばしば偏狭なナショナリズムや排他的なリージョナリズム(地域主義)もしくは愛国主義に逆なり、文化摩擦や民族紛争にも至っている今日の世界において、台湾人